

世界文学に対する一つの態度

——「言葉のお守りの使用法」を手掛かりに

佐藤 光

コスモポリタンはうさんくさい。

大正的コスモポリタニズムという言葉としばしば結び付けられるのが白樺であり、その代表者が武者小路実篤である。私が白樺を本格的に読み始めたのは、京大英文の修士の頃だった。柳宗悦、志賀直哉、武者小路実篤を文庫本から全集へと読み進めた。院生の時に柳の全集を買い、就職して仙台に移ってから志賀の全集を買った。『柳宗悦』を書いた鶴見俊輔は、白樺の人々は十三、四歳の頃の「準撰集団」であり、「この架空共同体のニュースを読むのがたのしみだった」と振り返る（『架空の共同体』）。『白樺たちの大正』の著者である関川夏央は、生きている人が怖い、だから「むかし死んだ人をむしろ友として、その逃避のなかにきわどく活を見出すうとしている」と書いた（『ただの人』の人生）。鶴見と関川は、私の前を歩く先達として立ち現れる。

「天津順吉」にあらわれたツッパリぶりと、断絶した父子関係を復活させつつも、譲歩も妥協もしない「和解」の頑固

さに、気骨を感じた。合理的で、簡潔で、不要な装飾を削り落とした志賀の文体を好ましく思った。また、柳の工藝論や民藝論に見られるような、具体性の感覚に裏打ちされた文章に魅力を感じた。一方で、最初はぐいぐいと引き寄せられた武者小路に、私は違和感を持つようになった。『友情』で「世界的な仕事をするだろう」という言葉を見て、十代の私は、そうだ、そうだ、と感激したが、二十代の私は「世界的な仕事」とは何だろうか、とつまずいた。「すべての人の心は異なるが其間に何か共通なものがある、自分はそれを人類と云ふ巨人の精神と云ひたい」（『人生に就て』）と言われても、その「共通なもの」をどのようにして把握するのか、と考え込んだ。AとBに「共通なもの」があるとして、それがCにも共通する、と言うためには、Cをきちんと知らなければならぬ。AとBとCに「共通なもの」が確認できたとしても、それがDに当てはまるとは限らない。「共通なもの」が存在することを前提として、「人類と云ふ巨人の精神」と言い切つ

てしまふ世界観は何なのか。

思ひやりの廣大無辺と云ふことは、誰の心にもなり、誰の立場にもなつて、その心持や氣持を察して、その人の心持や氣持の同情すべき所を同情することである。人類の立場に立つこと、同じである。他人と自分とは別ものではないのである。他人の氣持はお互に感じられるものである。(武者小路実篤『人生を斯く考へる』)

私の読書ノートには、この言葉に対する当時の感想が残っている。他人と自分とは別ものである、他人の心、他人の立場、人類の立場になることなどできない、わかつたつもりになるな、思い上がるな、人の話を聞け、これは家父長的保護者としての傲岸不遜がにじみ出た言葉である、と二十代の私の血氣盛んなロマン派的反抗の精神が見てとれる。改めて読み返してみると、力の入り加減に氣恥ずかしくなるが、まあ、でも、やつぱり、そういうことでしょう、と思うので、二十五年前も今も、私は同じ踊りを踊っているのかもしれない。この後、武者小路は「自分が死ぬ方が真理が生きているのか、他の人の生命が本当に生きられるのか、人類の生長の為になるとか云ふ時は、そんな時は滅多にないが、生命をすてるべき時だと云つていゝであらう」(『論語私感』)と書き、「こん

な氣持のいい、美しい戦争が、嘗て地上に行はれたか」(『大東亜戦争私感』)と述べ、「自分を犠牲にすることで、反つて人類を生長させることが出来る人は、死を誇りに思ふやうに出てゐる」(『人生と青年』)と言つた。この流れの中で、武者小路は戦争を讚美する詩を続々と発表し、男は海鷲、女は結婚とまで言い始める(『野菜讚』)。大正的コスモポリタニズムの代表者が、なぜ、このようになってしまつたのか。

鶴見俊輔は、社会で正の価値を付与された言葉を組み合わせることによつて、實質的に無内容であるにもかかわらず、形式的には正統性を帯び、それゆえに無難に流通する文章作成術を「言葉のお守りの使用法」と呼んだ。

言葉のお守りの使用法とは、人がその住んでいる社会の権力者によつて正統と認められている価値体系を代表する言葉を、特に自分の社会的・政治的立場をまもるために、自分の上にかぶせたり、自分のする仕事の上にかぶせたりすることをいう。(鶴見俊輔「言葉のお守りの使用法について」)

鶴見は例として、戦前の日本で用いられた「国体」、「日本的」、「皇道」を挙げ、アメリカであれば「キリスト教的」、「精神的」、「民主主義的」という表現がお守り言葉として用

いられる、とした。現在であれば、「国際化」や「英語による発信」などがお守り言葉に該当するだろう。お守り言葉は、それ自体が神棚に置かれた言葉であるため、その実態が吟味されることはなく、従ってお守り言葉が散りばめられた言説は、無内容であるにもかかわらず、あるいは無内容であるからこそ、批判にさらされにくくなる。お守り言葉の化けの皮を剥がすためには、お守りの権威を権威として認めない合理的思考が必要だが、「言葉のお守りの使用がさかんな状況は、合理的思索のおとろえを示すもの」（鶴見前掲）なので、様々な外的要因により、受け取り手は既に思考停止状態にあることが多い。武者小路が用いた「世界的な仕事」や「人類の意志」も、肯定的な価値をまとい、且つ具体的な場に根を下ろしていないという意味で、空虚なお守り言葉の一種である。空虚であるから、そこには何でも代入することができ、第一次世界大戦期には暴力の否定と反戦とが「人類の意志」であつたのに対し、第二次世界大戦期には大東亜共栄圏の樹立が「人類の意志」となつた。では、反戦を掲げた武者小路と戦争支持に転じた武者小路とは、何が違うのか。

兵役に関する武者小路と志賀との会話が、自伝的小説『或る男』に出てくる。

又或る時、真面目になつて志賀は云つた。

「君は戦争にとられたらどうする」

「僕はゆくより仕方がないと思ふ」

「僕は殺される方が本当ぢやないかと思ふ」

志賀はさう云つた。（武者小路実篤『或る男』）

鶴見もまた同じ問いに直面する。ジャカルタの海軍武官府に軍属として勤務していた頃を回想して、鶴見は次のように言う。

戦況がわるくなるにつれて、この島にも空襲がふえ、島民の蜂起、敵軍の上陸が、問題にされるようになった。それら非常事態にそなえて軍事教練がはじまつた。逃亡ということを何度も私は考えて見たが、その行動計画を成功させるだけの実力を自分ももっていないとあきらめた。劇薬のかたまりを手にいれ、いつも、もって歩くことにした。どんな場合にも、人を殺さず、早目に自分が死ぬこと、これだけが自分のできることと思つた。（鶴見俊輔「戦争のくれた字引」）

志賀と武者小路と鶴見の言葉の重みは、徴兵制のある社会を想像しなければ、わからない。徴兵制という言葉だけではおそらく不充足であり、殺される可能性のある場所に送られ

て、そこで人を殺せと命令されるシステムに否応なしに巻き込まれること、というところまで下りていって、初めて彼らの言葉が持つ切実さに近づくことができる。つまり、反戦の意志表明を熱烈に行った頃の武者小路は、殺し合いの場に引き出されるかもしれない当事者として、具体的な状況を想定して言葉を紡いでいた。だから、武者小路の「人類の意志」は、当初、暴力の否定と反戦を体現し、すべての才能と生命が生きる世界を希求した。この日常生活の感覚と当事者意識を失った時、武者小路は土砂崩れを起こしたように、戦争讃美とファシズムへのめりこんだ。

コスモポリタニズムをめぐる柳の言葉は、武者小路と対照を成す。

だが国際主義は、とかく美しい夢に走って實際を忘れる。各国の特色までなくして一色になるといふやうなら私は反対する。各々のものが各々の独創に活きることのみが、他人を尊敬する真の余裕を産むのだと考へる。お互が寄与し合つてこそ世界の文化は進むのである。さういふ意味で日本は日本のものを世界に提供したい。(柳宗悦「日本を愛する」)

「日本を愛する」という表題は、当時の時局を反映してい

るが、内容は排他的なナショナルリズムとは程遠い。「国際主義は、とかく美しい夢に走って實際を忘れる」という言葉は、武者小路を意識した牽制球とも読めるが、そこまで踏み込んでよいかどうか。いずれにしても、柳は「各々のものが各々の独創に活きること」を主軸に据えた。その具体的な現れが民藝品であり、柳の言葉は、形も色も材質も異なる一つ一つのモノに根を下ろしている。「各々のものが各々の独創に活きること」の個別事例の集積が、日本民藝館だった。個別事例としてのモノを基盤として、民藝という概念が成立しているのであって、その逆ではない。これは憶測の域を出ないが、茶碗や湯呑みが割れる音に、柳は我慢がならなかったのではないだろうか。同じようなやり方で、鶴見はコスモポリタニズムをとらえ直す。

自分自身、そして自分たちのつきあっている誰彼と世界にちらはつている人びととをむすびつけて考えるこの考え方の中には、地域が世界にむすびつくという、逆説的な構造があつて、觀念の順位としてはけたはずれのように思えますが、そういう感じ方が、私たちの中に自然にそなわつており、それが觀念的なものとは思えません。土地の文化から世界の文化にむかう、この動きは、私たちの日常生活のリズムの中にあります。それは、世界国

家という架空のわくの中で考える種類のコスモポリタニズムと向いあうもう一つのコスモポリタニズムの芽です。(鶴見俊輔『戦争とは何だろうか』)

世界市民や同胞や協同などの理念から、倫理規範を下ろしてくるコスモポリタニズムとは異なり、日常生活の経験に支えられた自他共生思想というものがあるのではないか。そのあり方を考えるためには、個別事例を一つ一つ積み重ねていくしかないのではないか。この時、文学は、ユートピア文学のような思考実験から、詩という形式で表現された感情のほとはしりにいたるまで、資料の宝庫としての意味を持つ。

私は、言葉の向こうに、人と時代と社会を見る。一人一人の声から、時代と社会を逆照射し、生き抜くための指針となるようなものを取り出したい。だから、私の文学研究は、歴史研究という形をとる。私が求めているものは、体系的なイデオロギイではなく、断片的な知恵である。それは断片的であつてかまわない。相互矛盾が出てきたら、折り合いの付け方を考えればよい。断片的な知恵をいくつもいくつも並べることで、応用範囲の広い自家製の事例集ができあがる。この事例集は十人十色の事例集であり、作り手によつてそれぞれ内容が異なる。共通点より相違点に目を向けたい。てんでんばらばらであることに、居心地の良さを見る仕組みを探りたい。世界

文学という観点から、人類に共通する普遍的な文学観や価値観に迫ろうとする試みに対して、このような事例集の作成を依頼してみた気もするが、それは飛行機に向かつて歩け、と言うようなものかもしれない。

世界文学という概念は、こうして私の前を通り過ぎて行く。